

5月10日（日）サムエル記第28章1～8節

「主は、ダビデの行く先々で、彼に勝利を与えられた。」（6節）

1節では「ダビデはペリシテ人を討って、これを屈服させた」と簡潔に述べられています。メテグ・ハ・アンマという町の正確な位置は分かりかねますが、歴代誌第一18章1節には、「ガテとそれに属する町々」とありますので、ペリシテに属する町の一つと考えられます。

モアブは、ダビデがサウルに追われていた時に隠れ場所とした所でもありました。（サムエル記第一22章3節）またルツがモアブ人でもありましたので、ルツの子孫であったダビデにからしますと、モアブの人たちは姻戚関係にあったと言えます。それでもダビデは、容赦なくモアブを討ちました。（2節）そして、捕らえた者を地面に伏させ、測り縄で彼らを測ったのですが、縄二本分の背丈のある体格の良い者は殺し、縄一本分の背丈しかない者は生かし、ダビデのしもべとして貢ぎ物を納めさせました。

3節からはツォバの王、レホブの子ハダドエゼルが、ユーフラテス川流域にその勢力を回復しようとして行ったとき、ダビデは彼を討ちました。さらに、ダマスコのアラムがツォバの王ハダドエゼルを助けに来ましたが、ダビデはアラムを討ち、アラムはダビデのしもべとなり、貢ぎ物を納める者となりました。

ここにはダビデの周りの国々に対する軍事上の勝利が記録されていますが、ダビデの勝利の秘訣は、「主は、ダビデの行く先々で、彼に勝利を与えられた。」ということでした。もちろんダビデも戦略的に優れた知将であったとは思いますが、主によってダビデは勝利を収めることができたのです。もし私たちの歩みの中で、何か成功を収めるようなことがあれば、それは主が私たちのために働いてくださった結果です。その時には、すべての栄光を主にお返しして、心からの感謝をもって主の御名をたたえましょう。

5月11日（月）サムエル記第28章9～14節

「ダビデ王は、それらもまた、主のために聖別した。」（11節）

ハマテの王トイは、ダビデがハダドエゼルの全軍勢を打ち破ったことを聞き、息子をダビデのもとに遣わし、安否を尋ね、彼がハダドエゼルに勝利したことに対して祝福のことばを述べました。さらに貢ぎ物として使者のヨラムは銀の器、金の器、青銅の器を携えていました。このことについては、降伏の意思表示であったと言う人もありますが、恐らくはイスラエルと同盟を結ぼうとしたか、もしくは何らかのかたちでの将来的な支援を約束する意味合いがあったと思われます。そして、ヨラムから受け取った物をダビデは主のために聖別します。これは、受け取った物を決して自分のものとする事なく、主にささげることで、主に栄光を帰すことを意味しています。11、12節には「彼が征服したすべての国々から取って聖別した銀や金、すなわちアラム、モアブ、アンモン人、ペリシテ人、アマレク人から取った物、およびツォバの王、

レホブの子ハダドエゼルからの分捕り物と同様にした」とありますが、ダビデは戦いで勝利を通して得た物を決して自分だけのものにはせず、主に聖別すべき物は聖別していたことが分かります。それは、昨日も学びましたように、主が行く先々で彼に勝利を与えられたので、戦いに勝利することができたと思っていたからです。私たちも主の恵みによって生かされていることを自覚的に知っているでしょうか。そうであれば、私たちは受け取った物の中から主のために聖別した心からの献げ物として主にお献げしていくことができるはずです。私たちの毎回の主への献げ物は、私たちが主への感謝により信仰をもって聖別したものとなっているのでしょうか。それはかたちだけの献げ物になってしまっていないでしょうか。

5月12日（火）サムエル記第二8章15～18節

「ダビデは全イスラエルを治めた。ダビデはその民のすべてにさばきと正義を行った。」(15 節)

ツェルヤの子ヨアブは。ダビデの甥で（歴代誌第一2章16節）アブネルを殺しましたが、軍団長とされました。アヒルデの子ヨシャファテは、史官に任じられました。史官は聞き慣れない官職ですが、一国もしくは集団の歴史を著述し、体系的に記録する働きをする人です。17節では、祭司としてアヒトブの子ツァドクとエブヤタルの子アヒメレクが任じられ、王に情報を伝え、助言を与え、王の命令を伝える書記はセラヤでした。「エホヤダの子ベナヤはクレタ人とペレテ人の上に立つ者」とありますが、ケレテ人とペレテ人は、王の護衛という特別な任務を持った傭兵で、勇猛な戦士であったエホヤダの子ベナヤの指揮下に入りました。（サムエル記第二23章20～22節）そして「ダビデの息子たちは祭司であった」とありますが、レビ人以外は祭司になれませんか、どのような意味なのかよく分かりませんし、さまざまな提案もなされています。その中で一つの可能性としては、公の場で儀式を執り行う祭司ではなく、王家の中で個人的に祭儀を行う者たちであった可能性はあります。

15節には「ダビデはその民のすべてにさばきと正義を行った」とあります。ダビデは決して偏見や差別なく、公正な政治やさばきを行ったことが分かります。正義は、まさに主ご自身の属性であって、主を信じ、主によって召されたダビデは、まさに神の義をイスラエルの上になそうとしていたことが分かります。私たちは、聖書のみことばにより神がどのようなお方か知らされている一人一人です。そうであれば、私たちを通して神の愛、聖さ、恵み深さなどが証しされ、人々が目に見えない神を知り、神をあがめるようになり、私たちを通して神の栄光が現れるように祈ってまいりたいと思わされます。

5月13日（水）サムエル記第二9章1～8節

「いったい、このしもべは何なのでしょう。あなた様が、この死んだ犬のような私を顧みてくださるとは。」(8節)

1節でダビデは、サウルの家のももべであったツィバを呼び出し、サウルの家のももで生き残っている者がいないかと尋ねます。その理由は、かつて主の御名によってヨナタンと結んだ契約のゆえに彼の家のももに真実を尽くしたいということでした。(サムエル記第一20章16節)しかしダビデは、ヨナタンの家だけではなく、サウルの家にも範囲を広げて真実を尽くそうとしたのです。ヨナタンは戦死してしまいましたので、仮にダビデが契約を守らなくても責める人は誰もいなかったでしょう。それでも、ダビデは主の御名によって結んだ契約については真実を尽くしたいと思ったのでしょうし、ヨナタンとの真実な愛の交わりがダビデにサウルの家に対しても真実を尽くしたいとの気持ちにさせたことを思われます。私達も教会の兄弟姉妹と主にある交わりに入れられている一人ひとりです。そうであれば私達の交わりの中心には、常に愛と真実があるべきです。偽りのない愛をもって愛すべきです。また私達は主イエス様の真実な愛により愛されている一人ひとりですから、主の愛をもって他の兄弟姉妹方を愛すべきです。例えば、私達は兄弟姉妹たちに言えないような言動はないでしょうか。また心を尽くして教会の兄弟姉妹たちのために祈っているでしょうか。そのことをもう一度ともに考えてみましょう。

ツィバを通して、足の不自由なヨナタンの息子のメフィボシェテがいることを知ります。ダビデはメフィボシェテを連れて来させます。突然ダビデ王の前に呼ばれたわけですから、恐れが彼にあったと思いますが、そのメフィボシェテにダビデは「恐れることはない。」と言い、「私は、あなたの父ヨナタンのゆえに、あなたに恵みを施そう。あなたの祖父サウルの地所をすべてあなたに返そう。あなたはいつも私の食卓で食事をするようになる。」と言いました。メフィボシェテは、自分の財産を持つことができるようになり、また王族の一員として食卓にもつかるようになったのです。そのことについてメフィボシェテは、「いったい、このしもべは何なのでしょう。あなた様が、この死んだ犬のような私を顧みてくださるとは。」としか言うことができませんでした。私達も主の御前に罪人であり、主に敵対する者であり、まさに死んだ犬のような者でした。しかし、その私達に救いを与えて、霊的死の状態から生かして下さり、御国を相続する者とされ、御国とともに主の食卓にあずかる者としてくださいました。主が私達に与えてくださった救いの豊かさを思えば、私達もメフィボシェテのように、「いったい、このしもべは何なのでしょう。あなた様が、この死んだ犬のような私を顧みてくださるとは。」としか言うことができません。今日も主の恵みに心からの感謝をささげましょう。

5月14日(木) サムエル記第二9章9～13節

「わが主、王がこのしもべに申しつけられたとおりに、このしもべはいたします。」(11節)

7節でダビデはメフィボシェテに「あなたの祖父サウルの地所をすべてあなたに返そう。」と言いました。ですから、9節でダビデはサウルのしもべツィバに「サウルと、その一家の所有になっていた物をみな、私はあなたの主人の息子に与えた。」と言います。しかし仮にメフィボシ

エテが祖父サウルが所有していた土地を譲り受けたとしても、足が不自由ですから土地を管理することができません。そこでダビデは10節で「あなたも、あなたの息子たちも、あなたの召使たちも、彼のために土地を耕し、作物を持って来て、それがあなたの主人（サウル）の息子（メフィボシェテ）のパン、また食物となる。」とされています。つまり十五人のツィバの息子たちと二十人の召使が、メフィボシェテの土地を耕して、収穫物をメフィボシェテのもとに持って来て、メフィボシェテとミカという名の小さな子を養えと命じたのです。それに対してシェバは、「わが主、王がこのしもべに申しつけられたとおりに、このしもべはいたします。」と答えました。確かにサウルのしもべであったツィバが、サウルの息子の世話をするということは決して理不尽とは言えないでしょう。しかし、考えようによっては、なぜ今さらメフィボシェテの世話をしなければならないのかという気持ちが出てきても不思議ではないでしょう。主も私たちに対してみことばによりみこころを示しながら、さまざまなことを命じられます。時にはなぜ自分がこのようなことをと思うことに召されることがあるかもしれません。しかし、そこには主の深いご計画があることを信じ、また自らを通して主の栄光が現れることを信じて、「主なる神様。あなたがこのしもべに申しつけられたとおりに、このしもべはいたします。」と応答しつつ、主が自分に与えられた務めを果たしてまいりたいと思わされます。

5月15日（金）サムエル記第二10章1～5節

「ひげが伸びるまでエリコにとどまり、それから帰って来なさい。」（5節）

アンモン人の王のナハシュが死に、息子のハヌンが代わって王になった時に、ダビデはナハシュが自分に真実を尽くしてくれたように、息子ハヌンに真実を尽くそうとアンモン人ハヌンのもとに弔問団を送ります。聖書には記されていませんが、ダビデはナハシュと友好的な関係を築くのに成功したのでしょうか。そして、その友好的な関係を維持するために悔みを言おうと家来たちを使者として遣わしました。ところが、アンモン人の首長たちは、ダビデの真意を疑い、実は国を偵察するために家来を遣わそうとしているのではないかと進言します。ですから、ダビデとナハシュの関係がどこまでのものであったかということとはよく分かりません。いずれにしても王ハヌンは首長たちの言葉を受け入れて、ダビデの家来たちを捕らえ、ひげを半分だけ剃り落とし、衣を半分に切って尻のあたりまでにして送り返しました。これは、最大限の侮辱と辱めの行為です。それで家来たちは非常に恥じたのです。それで、ダビデはこの家来たちをいたわり、「ひげが伸びるまでエリコにとどまり、それから帰って来なさい。」と言いました。ここで私はダビデの姿から深く教えられました。6節に「アンモン人は、自分たちがダビデに憎まれるようになったのを見てとった。」とありますが、ある意味ダビデに対する宣戦布告と受け取られても仕方がないようなことをハヌンはしたのです。しかしダビデはそれに応じるためにすぐに軍隊を出そうとはしませんでした。ここにダビデの忍耐を見るとともに主によって変えられているダビデの姿を私たちは見ることができます。私たちも、周りの人々から謂れのな

い嫌がらせをされることがあるかもしれませんし、今回のダビデのようにこちらが善を行っても悪をもって返されることがあるかもしれません。そのような時に私たちは主によって忍耐を養わせていただきたいと思いますし、忍耐できるように日々訓練させていただきたいと思います。

5月16日（土）サムエル記第二10章6～19節

「強くあれ。われわれの民のため、われわれの神の町々のために、奮い立とう。主が、御目にかなうことをされるのだ。」（12節）

アンモン人はダビデからの報復があることを予期して、傭兵たちを雇いました。ダビデはこれを聞き、彼らを迎え撃つために軍団長ヨアブと勇士たちの全軍を送りました。8節はアンモン人たちの戦術が記されていて、まずアンモン人たちが門の入り口でヨアブと全軍を迎え撃ち、傭兵として雇われている者たちは野にいて、9節を見ますと、恐らくダビデ軍を背後から彼らが攻撃しようとしていたのでしょう。ヨアブは彼らの作戦に気がつき、自分が野にいるアラム人を攻め、アンモン人は兄弟アビシャイに任せました。そして11節で、もし苦戦するようであれば、互いに助け合うことを約束します。そして12節で「強くあれ。われわれの民のため、われわれの神の町々のために、奮い立とう。主が、御目にかなうことをされるのだ」と励まします。ダビデから軍団長に選ばれるほどですからヨアブは、戦術的才能もあり、ダビデの軍勢は決してアンモン人やアラム人の軍隊に見劣りすることはなかったはずです。しかし、ヨアブは決して目に見えるところに頼らず、信仰をもって主にのみ頼ろうとしました。信仰をもって頼る者を主は決して捨てられることはないはずですから、ヨアブには勝利の確信があったことでしょう。私たちも、目に見えるところに頼ってしまいがちです。何とかかなりそうだと思えば、主よりも目に見えるところに頼って高慢になり、もし目に見える部分が頼りなければ最初からうまくいかないといきなり意気消沈してしまうことはないでしょうか。目に見えるところに頼らない信仰を主にあって日々養いたいものです。

15節で、アラム人は、自分たちがイスラエルに打ち負かされるのを見て集結しました。この戦いが重要なものだと思っただけで、彼自らがイスラエル全軍を集結させ、彼らを率いてアラム人と戦いました。その結果はイスラエルの大勝利で（18節）ハダドエゼルの王たちは和を講じ、イスラエルに奴隷として仕えるようになりました。このように御目にかなうことをなさる主は、信じる者に必ず勝利を与えてくださいます。